

『就実論叢』第47号 抜刷

就実大学・就実短期大学 2018年2月28日 発行

## 木地師の移動～定住

－阿州、信州の山野で躍動した職能技術集団－

**The awaterritory and shinsyuterritory mountainous move a life is inhabit a  
woodcutter skillfully mentor move a tree bush cut down revolve spin the carpenter  
planed a bowl and a tray and urushi japanese lacquer a profession folklore.**

田 中 誠  
楯 英 雄

# 木地師の移動～定住

## －阿州、信州の山野で躍動した職能技術集団－

The awaterritory and shinsyuterritory mountainous move a life is inhabit a woodcutter skillfully mentor move a tree bush cut down revolve spin the carpenter planed a bowl and a tray and urushi japanese lacquer a profession folklore.

田 中 誠 (幼児教育学科)

TANAKA Makoto

楯 英 雄 (日本木地師学会長)

TATE Hideo

Key word : 轆轤、惟喬親王、漂移の民

### I. 序

木地師とは、轆轤を用いて轆轤鉋挽いて椀や盆、杓子などの木工品を製造していた木工技術職人である。呼称は木地屋、轆轤師、鹿路師、六呂師、杓子師とも呼ばれた。柳田國男監修 民俗学辞典は、木地師について次のように述べている。山中の樹を伐り、鹿路を遣って椀・盆などの木地を作る工人たちであると述べている。他の呼び方としては、木地師・木地くり・轆轤師などとも呼んでいるところもある。そして、諸國の山中に木地師の墓跡と称するものも少なくないことや、また木地師が小屋掛けした跡を木地小屋・木地畑などと称して、今なおその名をとどめる地名が残っている。

徳島県郷土文化会館民俗文化財編集委員会編集の「民俗文化財集 阿波の木地師」では、木地師について次のように述べている。木地師とは近世になって格別に山野を漂移して、その地域一帯の原木を伐り倒しは、木工用轆轤道具を用いて椀・盆・丸膳・高坏などの円形木器の白木地類を挽いていた特殊な旅職集団のことであり、この特殊な工具や技術の保持者は、時に朝廷や幕府、封建諸侯から保護され、一種の特権として誇りを持った職能技術集団であると自認していた。そして、敢えて一般農民とは交流を控え、高貴な一族として住居も深山に孤立し、食料を自給できないから農（畑作）を営まず、木地製品を里方へ出荷して物々交換で衣食をつないでいたものである。

### II. 木地師研究について、その目的

戦後そして高度経済成長を機にわが国の社会状況、特に農山村から多くの若者が現金収入

を求め都市へと出稼ぎ労働に出た。若者の労働力により国は発展し世界の超大国へと進んだ。だが、農山村には子どもの姿を見ることもなく、超高齢化の老人ばかりとなっている。往時は茶屋堂を憩いの場として老人・子どもが集まり、そして語り合う場があったが、今では老人、子どもが田舎道を歩いている姿を殆ど見かけなくなった。空き家が目立ち、人の弾む声が聞こえなくなった。民俗学を継承するに当り、楯英雄（日本木地師学会長）は、化石は数億年後迄残るが、民間伝承は語り部がいなくなるとその時点で民俗学は消滅してしまうと、さらに基層文化を守り・継承するには、やはり現地へ足を運び一つ一つ丹念に聴き・調べ、書き残すことが一民俗学者が果たす使命であると話された。爾来、田中三十年、楯六十年に及ぶ民俗学研究の一端を限られた紙数の中で阿州・信州の木地師の移動～定住を報告する。先人の研究者として知られる柳田國男・宮本常一・折口信夫・杉本寿・橋本鉄男、諸先生の研究を基に阿州・信州の山里を中心に踏査した。

### Ⅲ. 阿州の木地師

#### 1) 木地師の移動と漂移



図1：東祖谷山村西山に残る木地師の住居跡、  
(海拔九百米)：平成28年採集



木地師の本據は近江愛知郡小椋村<sup>おぐら</sup>である。轆轤の使用はかつては極めて特殊なところから、木地師の大部分は数百年前から、原料の良材を求めて、諸國の山から山へと漂移を続け、次第に里へ下り、村生活を営むにいたつた。里の住民からは幾らか軽められていたと云われるが、わが国の工藝史には大きな足跡を印した人々である。

図2：西山木地師の墓石群の一つ：平成28年採集

墓石群の中に唯一地藏墓が鎮座している。

地藏墓には、諦念妙義信女、天保八酉十一月十一日、久蔵母と刻まれている。

安永四年の君ヶ畑氏子狩帳 第二十一号簿冊（木地屋の移住史 p 300）に、

- |        |      |         |
|--------|------|---------|
| 一 壺匁貳分 | 御はつを | 小椋惣次右衛門 |
| 一 五分   | 御き新  | 同人      |
| 一 壺匁貳分 | 御はつを | □右衛門    |

一 五分 御き新 同人

五月廿七日

右之通り相渡相済申候とある。

文政十三年氏子駈帳（木地師制度の研究 p 734）に、次のように記されている。

阿州美馬郡西山木地師

一 壺匁貳分 御初穂 小椋健左衛門 花押

一 壺匁四分 氏子駈り 同人

一 壺匁貳分 御初穂 小椋孫左衛門 花押

一 壺匁四分 氏子駈り 同人

弘化二年の君ヶ畑氏子狩帳 第三十九号簿冊（木地屋の移住史 p 427）では、

阿州美馬郡いや谷□□山（西山であろう）

一 銀札五匁 小椋藤藏

一 銀札三匁 小椋八兵衛

一 銀札五匁 小椋久藏

一 銀札四匁 小椋宮之助

同谷為納

上記に久藏の名がある。久藏の移動・定住先は、明治五年の君ヶ畑氏子狩帳 第五十一号簿冊（木地屋の移住史 p 536）に次のように記されている。

美馬郡なごろ山

一 人数 男三人

女貳人 小椋久藏

一 人数 男貳人

女三人 小椋八太郎

一 人数 男貳人

女壺人 小椋藤藏

小椋久藏はじめ西山木地師は現在の東祖谷山村字菅生名頃に移り住んでいる。名頃は小椋姓をはじめとして、現在は中野、尾方、名頃、<sup>つづき</sup>続姓がみえるが元は小椋家からの別れ屋である。東祖谷山村菅生名頃在住の小椋辰幸氏によると、山八合目から名頃（海拔五百米）へ下り、多くの木地師は木地業をやめ、炭焼き、狩猟、そして建設業で生計を営み当地で居を構えたことが名頃集落の興りでもあると古老からの伝承を語り継いでいる。

## 2) 阿州木地師の漂移

阿波国では、日本三大秘境の一つとして知られる阿波国の祖谷山郷（現東祖谷山村）、片川郷（現一字村字木地屋）の木地師が半田村（現半田町）へ供給し半田漆器が幸盛を誇った。木地師は小野宮惟喬親王（承和十一年「八四四」～寛永九年「八九七」）を祖神とするとい

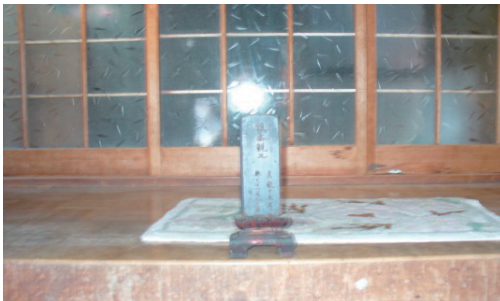


う傳説を持ち、中古以来いわゆる木地屋文書と稱する由來書を所持した。

図3：小椋辰幸家に伝わる木地屋文書（徳島県東祖谷歴史民俗資料館所蔵）

ここで、小野宮惟喬親王（以下惟喬親王）とはどのような人物であったか記しておく。

惟喬親王とは、五五代文徳天皇の第一皇子として承和十一年（八四四）に生まれたが、天皇即位の当時は、まだやっと七歳であった。しかし、聡明で天皇の愛情もことのほか深く、当然皇太子になることが予想されていた。ところが、ことは以外にも、第四皇子の惟仁親王が選ばれた。図4：惟喬親王位牌、徳島県一字村字木地屋・小倉



智・百合子氏所蔵。註：位牌に貞観十一年と記銘されている。小倉家に先祖がいつの時代に入手したか記録が残っていない。

この皇子は天皇即位の五日目に生まれたといわれている。この異常なハプニングは背後には次のような確執・陰謀があったと伝えられている。惟喬親王の生母は紀氏出身の更衣にすぎず、それに比べると惟仁親王の生母は当時最も権勢を誇った藤原氏出身の皇后であったといわれているからである。いうまでもなく宮廷内の力関係で、両者は大きな距離ができ、そして、まもなく惟仁親王は、年九歳で皇位を継いだ。これが五六代の清和天皇である。したがって、それ以後の惟喬親王は、第一皇子として生まれながら、生涯國の中央政治の圏外を歩まれることとなり、近江國愛知郡小椋郷（滋賀県神崎郡永源寺町）に永住の志を固められ、郷内の小松畑（あるいは筒井峠）へお留まりになり、その後出家され、以後親王を素覚法親王となった。この親王がたまたま御読經をしておられる時、法華經の經軸が回転することから轆轤という挽き物工具を思いつかれ、早速、付近の山民に工具の使用法を指導して製品化し、以後その生業の糧とされたのが、わが国木地挽の創始とされた。こうした伝説は、わが國の民族性から考えて尊貴であり、悲劇的な伝説を信じやすい習性の持ち主であると思われる。そして、これら伝説を運搬者としての役目を果たし定着化させた集団が近代に至るまで諸国山野を移住しつつ生活した木地師であった。このことについて、橋本鉄男（ものと人間の文化史31, ろくろ p37-47）は、「こうした由緒に基づいて、惟喬親王は木地屋の職の祖神だとか、つまり『ろくろ』の神様だといって、崇められることになったという。これが木地屋の職の本縁譚、つまり『ろくろ』の起源にかこつけた伝説である。このことを前提にして近江の木地屋根元地説は、近世以降世間一般に流布せられ、抜きがたい固定観念として存在した」と述べている。



君ヶ畑へ隠棲し轆轤を考案し、君ヶ畑・大君ヶ畑・筒井畑の轆轤師であった。

木地師は轆轤と呼ぶ工具を用い、主として円形木器である食具の椀・盆などの椀地を作った特殊な工人である。



左図5：小椋辰幸家に伝わる手挽轆轤（徳島県東祖谷歴史民俗資料館所蔵）：平成28年採集

近江小椋谷（現滋賀県神崎郡永源寺町）の蛭谷・君ヶ畑には、前者に正保四年（一六四七）以降の三二簿冊、後者に元禄七年（一六九四）以降五一簿冊からなる氏子駈（狩帳が遺されており、近世三百年、

この二部落が氏子駈（狩）という特異な制度の下に、殆ど全国に分布する木地師を統制点検した記録である。

この谷に流蔓した惟嵩親王を職の祖神とする縁起、その由緒によって朱雀天皇・正親町天皇から得たとする綸旨。

図6：高知県大野見村の木椋家<sup>おぐら</sup>に伝わる朱雀天皇の御綸旨：平成8年・28年採集



さらに信長・秀吉が与えた免状を加えてからは、巧みにその稼職権独占の証左としてとり纏め、次第に座に類似した体制を整えた。

高知県大野見村・木椋家には織田信長免許状（現高知県大野見・四万十民俗館所蔵）、正親町天皇御綸旨、豊臣秀吉免許状が伝えられ、同民俗館に所蔵されている。

こうして惟喬信仰を中核とした木地屋の近江根源説が喧伝され、諸國の木地師はすべて江州渡木地師が正統であると自らも信じ、人にも信じさせようとした。木地師の生産形態はきわめて原始的で、つねに山野に仮泊しながら、木地の原材を採取したが、付近に良材が尽きると跡地を棄て、所を変えて漂泊するという生活であった。

阿州への入国について、西祖谷山村史及び阿波の木地師では、「祖谷山入山は鎌倉時代であり、西岡の村名轆轤師は最初に入郷定着した人々によって命名されたものだ」と記されている。また、橘文策は、「阿波入国の経路としては紀州から渡海してき海岸に達し、剣山周辺の山岳地帯へ定着した紀州説と、山陽道から瀬戸内海を渡って伊予を過ぎ、剣山周辺へ到着したという中国説との二方面経路がある」と見方している。地形的にみると、阿州は紀州と海を距てて近く、紀州の根来や黒江系の人々との交流が容易であり、広葉樹の一大樹林地帯を構成している剣山山脈一帯を橋頭堡とし、原生林の祖谷山を根拠地として活動発展し、

次、予州・土州などの諸国と交流したものかと述べている。また、杉本壽は、木地師制度の研究第二巻の中で、「四国における轆轤師制度の発達には、その地域性から推定して、四国山脈の果たした役割を以て第一義的なものと為している。剣山(一九五五米)、三嶺(一八九四米)、三傍子山(一一五八米)、白髪山(一四七〇米)、笹ヶ峰(一八六〇米)、瓶ヶ森(一八九七米)、石鎚山(一九二一米)、天狗岳(一九八二米)、堂ヶ森(一六九〇米)



諸山とし、それらからの支山脈と河川、溪谷を含めた山岳地帯に木地屋・轆轤師・木地師の集落が形成されている」と述べている。阿州にあっては、剣山を中心とした美馬・三好・麻植・名西の四郡の吉野川水系と那賀・勝浦両郡の那賀川水系に一部海部川を含めた海部郡等の地域が、木地師活躍の原拠として大別できると述べている。

これを旧村単位に細分すると、美馬郡では一字・東祖谷山、西祖谷山・半田・半田口山・半田奥山の各村に木地師住の跡と墓石群残っている。

図7：一字村字木地屋禪定谷に建つ(海拔千米)木地墓「石碑には、享和酉年六月六日・歸命本覚信士・木地師万兵エ」とある：平成28年採集

(註) 木地師万兵エは、寛政九年氏子駆帳(木地師制度の研究 p 676)に次のように記されている。

阿州みま郡半田山木地師

- 一 五匁御初尾 万兵衛
- 一 壺匁氏子駈 文左衛門
- 一 三匁御初尾 文左衛門
- 一 六分氏子駈 文左衛門

峻梁山脈の尾根道は木地師・山伏が生活道として拓いた道であり、東祖谷山村字萱生・西山・落合・名頃<sup>みよう</sup>の各名の木地師は峻梁山脈の尾根を歩き、漆器業の一大拠点として栄えた半田へと渡り歩いた道である。また、峻梁山脈の稜線(一六二〇米地点)に石堂神社がある。神社は四国三霊峰のひとつであり、一字村・半田町・東祖谷山村の三村に位置し、天下三筆のひとつ、嵯峨天皇を奉齊し風の神として神穂高く、明治以前は石堂山大権現と称して、夏季は数日にわたり山伏が柴灯護摩を焚き修行したと伝えられている。

阿州の木地師が最も多く活動した深淵<sup>みぶち</sup>には権大僧都万福院の墓がある。子孫によると、先祖は木地師であり山伏であり、明治に入り小椋姓から茅窪姓を改めたようである。藩政時代には深淵という地名はなく、萱の久保と云われていた。萱の久保から現在の姓、茅窪に命名した証が権大僧都万福院の墓の横に文政七年の古い墓に萱久保と刻まれている。

一字村史には一字村字大横の山伏・尼の墓が残っているので記しておく。

覚蔵法印 元禄十六年 (一七〇三)

寿定禪定人 正徳三巳年 (一七一三)

権大僧都光義 同

妙信禪定尼 享保二十四年 (一七一七)

図8：禪定谷奥深い稜線に木地師万兵エとともに木地師崑右エ門妻の地藏墓：平成28年採集



木地師崑右エ門妻

天保七申二月十三日と刻まれ、縦三十七センチ・横十八センチ)の地藏墓である。木地師 崑右エ門について文政十三年の氏子駆帳(木地師制度の研究)に次のように記されている。

#### 阿州美馬郡菅生村木地師

一 壺匁貳分 御初尾 喜右衛門

一 八分 氏子かり 同人

君ヶ畑氏子狩帳 第三十九号簿冊 弘化二年(木地師の移住史)では次のように記されている。

#### ふとう山

一 金壺分 小椋茂左衛門

一 銀五匁 小椋勇助

一 同三匁 小椋喜右衛門

一 同壺封 小椋豊八

#### 阿州みま郡半田山木地屋

一 五匁御初尾 万兵衛

一 壺匁氏子駈 文左衛門

一 三匁御初尾 文左衛門

一 六分氏子駈 文左衛門

2基の墓の下には清流が流れており、かつて木地師が山葵田を栽培していた伝承が残っている。谷名は禪定谷と云われ、おそらく修験者によって命名したものであろう。「民俗文化財集 阿波の木地師 p 48」に、轆轤師の阿州入国は鎌倉時代(一一八五～一三三三)とされているが、長い年月の変遷を経て、轆轤師独特の技術を發揮して彼等の生業された盆・椀類の木地生産へ本格的に取り組んだ時代は、国内に久しく続いた戦乱の千戈が決着し、やっと平和な世相が訪れた江戸初期ぐらいではなかろうかと。幕府諸政の安定したころから、將軍家をはじめとして諸国の大名達は自藩の布告政策上から、寮内風土に適した種々な殖産工業



を保護奨励し、それぞれの地方色を持ち、庶民生活と関連の深い織物・陶器・漆器類の生産で、庶民階層の生活内容が少しずつ豊富になり、それらの品物を使用する度合が高まるにつれ、その生産発祥や起源年代の新旧は別としても、庶民階級の需要の増大に応じて発達興盛するに至ったと述べている。



### 3) 阿州半田塗の起源

半田町誌下巻には、半田漆の起源は、明暦年間（一六五六～五八）、天和以降（一六八一～八四）、元禄時代（一六八八～一七〇四）の諸説とされている。この諸説は、すべて後世になって記述され、古老よりの伝承が出所であり、根拠に紛らわしい説が多々あるように思えると記している。

裏付けに関して、筒井公文所の氏子駈帳によって、阿州に入国した木地師の所在地・軒数・家族数が享保20年志古かり帳（氏子駈帳原簿：木地師制度の研究）に、次のように記載されている。図9：半田奥山中屋集落の木地墓：平成28年採集 註：半田奥山の木地師は、祖谷・一字から荒木地を運び、半田町に近い処で仮住まいをして木地製品に仕上げ半田漆器へと運んだ中継地であった。

#### 阿州み馬郡いや（祖谷）谷山

壱匁 初尾 与惣左衛門

壱匁貳分 氏子 同人

御まきもの壺本

壱匁 初尾 権之丞

四分 同人

壱匁 初尾氏子 仁兵衛

氏子駈（狩帳）による木地師の移動と変遷について、東祖谷山村落合の十九（ツク）谷から丸見谷へ移動した痕跡を筆者は踏査した。

氏子狩帳は実に正確に記載されており、しかも山八～九号目で雄飛された木地師集団は、後世の民俗学者・郷土史家に貴重な遺跡（墓石・茅葺き屋敷・畠）を残している。十九（ツク）谷は丸見谷と合流して落合谷を形成して祖谷川に流れ込む支流の谷である、遡上すると落合峠（海拔一五一九米）である。

寛延四年（一七五一）氏子駈帳に「いや谷 清左衛門 うじこ 壱匁四分」と記録されている。清左衛門と室（妻）・母・童子の墓石が8合目付近の造林の中に慄然としていた。墓石には慶應元年と刻まれており、十九（ツク）谷に現れる清左衛門は天保三年辰（一八三二）

阿州美馬郡谷道山（同村内）で轆轤を挽いている。

- 一 壺匁貳分 御初穂 小椋勝左衛門
- 一 四 分 氏子駈 同人 家内貳人
- 一 壺匁貳分 御初穂 同清左衛門（同人倅）
- 一 六 分 氏子駈 同人 家内三人
  
- 一 三 匁 御初穂 小椋友左衛門（平八倅）
- 一 壺匁貳分 氏子駈 同人 家内六人
- 一 壺匁貳分 御初穂 小椋弥太郎
- 一 四 分 氏子がり 家内二人
- 一 壺匁貳分 御初穂 同 幸次郎（小椋勝左衛門倅）
- 一 八 分 氏子がり 家内四人

天保三辰十月十一日改

- 一 印 三匁五分 糸ほしき 清左衛門
- 一 印 三匁五分 糸ほしき 武左衛門（幸次郎事）
- 一 印 三匁五分 糸ほしき 周 助（堅左衛門倅）

氏子駈帳原簿 p 734 に、阿州美馬郡谷道山での記録がある。

寛延四年（一七五一）蛭谷氏子駈帳に「いや谷 清左衛門の名がある」が見える。これは先祖の清左衛門であろうと考えられる。谷道から先祖の故郷のいや谷（十九谷）に戻り山を



移動し轆轤を挽きに生計の維持を図っていたのではないかとと思われる。

図10、11：落合十九（ツク）谷本地師墓石群：平成28年採集

清左衛門の石碑は次の通りである。

秋山義道信士・貞七実父・慶應元年丑九月八日銘記されている。

石碑土台横26センチ・高さ10センチ、墓碑は横15センチ・高さ32センチ

清左衛門の石碑から少し下段に3基並んだ墓碑は、左側から秋月妙○信女・清左衛門室・貞七実母・慶應元丑八月廿六日銘記されている。石碑は、土台横24センチ・高さ9センチ、墓碑は横15センチ・高さ32センチ。

3基の中央に、紫艶妙還信女・小椋政



吉母・ 八十六オシモン・明治十二卯九月廿二日銘記されていた。土台横23センチ・高さ11センチ、墓碑は横15センチ・高さ34センチ。 右側に童子と刻まれた地藏さんが倒れていた。おそらく子どもの墓であろう。

当時の十九（ツク）谷も照葉樹林帯で景色もよく祖谷の峰々を一望できる処であり、「阿波の木地師」表紙絵がそのようである。周辺は石垣が残り住居跡がある。十九（ツク）谷木地師住居跡の背後には土佐・祖谷街道がかすかに残り、往時は木地師たちが半田へと木地製品を運んだルートであった。

落合集落から北東に遡上すると丸見谷がある。そこに小椋家・福永家の屋敷跡が残っている。

丸見谷の木地師は、十九（ツク）谷から移動（転居）して来たものである。木地師の子孫である小椋辰幸氏（東祖谷山集落支援員・小椋萬次郎翁の曾孫）に案内していただいた。丸見谷は実に陽当たりがよく、傾斜を活用した畠が残っており廃屋となっている福永（旧小椋）と小椋屋敷を通り4基の墓碑を確認した。

図12：落合丸見谷木地師墓石群：平成28年採集



左側から、蓮○真明信士・俗名 小椋信太郎

小椋悦次郎父・明治廿年旧五月十八日。

石碑土台 高さ11センチ・横26センチ。石塔高さ35センチ・横15センチ。

※小椋信太郎は明治十五年惟喬親王御千諱寄進長に記載されている。

教雲冥範居士・俗名政吉年七十五

小椋信太郎父・明治廿五年辰年十二月十二日。

石碑土台は川原石、石塔高さ40センチ・横13センチ。小椋政吉は明治十三年（一八八〇）寄進帳に落合山 小椋政吉と記載されている。

焼露妙勇信女、俗名 シウン・小椋永次郎母・明治三十四年旧七月十九日。

石碑土台は川原石、石塔高さ32.5センチ・横15.5センチ。

明治十三年（一八八〇）寄進帳に落合山 小椋永次郎と記載されている。

#### 4）阿州木地師と半田漆器のつながり

上述の半田塗にふれてはいるが、半田町誌下巻に半田塗について以下。

漆を塗るようになったのは江戸中期以後のことで、もとは特殊な工具を用いて、木地をくりぬいた素木地（しらきじ）の椀・盆類を制作していた。

この特殊な工具や技術の保持者は朝廷からも幕府からも保護され、選民ともいべき特権をもつ部族によって伝承された。その部族は木地ひき・木地屋・木地師・ろくろ師・ろくろ

屋などと呼ばれ、この特権を誇りとし敢えて一般農民と混婚せず、住居も深山に孤立し、食料も自給自足できないから製品を里方に搬出して物々交換で衣食をつないだ。「半田塗」とは、江戸中期に半田の先駆者が、それら木地ひきの製品を集荷し、これに漆で加工して全国へ売り出した時点で生まれた商品名であると述べている。

近江国蛭谷筒井公文所神官（氏子総代）が享保二十年（一七三五）九月に現地を出発し、「第一号簿冊」を携えて奉加巡国の途中、美馬郡東祖谷山深淵一帯の木地師の許へ訪れた。この時が阿波国へは二回目の入国であった。次いで、奉加の足を伸ばし、阿土国界（阿波・土佐）を越して土州葦生久保山（現高知県香美郡物部村久保）木地師群を記帳した際、土州久保木地師善六が「阿州美馬郡半田村にて塗し屋承はる」と同帳に銘記された。

（注：氏子駈帳第11節 享保二十年字志古かり帳：土州にろう「葦生」久保山三分 初尾半田村ニ而ぬし屋 善六 木地師制度の研究 p 455、）が記載されている。土州から善六はじめ四十人の木地師家族が半田村へ移住し塗師屋になったと記述されているが、どの場所で塗師屋をしたか不明である。しかし、木地師から塗師屋に転職したのは善六が最初の人物といわれている。半田では、その後木地師から塗師屋に転職した敷地屋利兵衛が宝暦後期にはじめられている。半田村で木地師より転職して塗師屋になった記録が君ヶ畑・高松御所氏子狩帳に記載されている。－近江国小椋庄蛭谷より1 km奥に君ヶ畑の大皇器地祖大神宮、高松御所（別当職金竜寺）がある。ここの氏子狩帳が初めて阿波へ入国した年は、宝暦六年（一七五六）の「第九号簿冊帳」であり、蛭谷筒井公文所氏子駈に遅れること九〇年後である。この帳簿に記載された木地師は美馬・三好郡で三一戸、海部・那賀郡で二五戸、計五六軒で、蛭谷筒井公文所氏子駈「第一三號簿冊」が阿波入りした延享三年（一七四六）記帳の六一戸に近い戸数になっている。次回の君ヶ畑「第一一號簿冊」が宝暦十一年（一七六一）四月に阿波廻国の時、「阿州三まの郡半田村ぬしや四匁左平太」とある同氏子狩帳に始めて半田村塗師屋が記帳された。木地師から塗師屋へと転じ、ともに深山と平地との経済・文化の連携が生まれ移動そして定住へと発展したものであろう。

#### Ⅳ. 信州の木地師

##### 1) 信州天竜川流域の木地師の定住集落

信州木地師の存在が多く見られた天竜川流域は、日本における大河の一つである。天竜川は信州の中心部諏訪湖に源をもち、伊那市、飯田市のある伊那谷を南流し、信州下伊那郡、遠州三河地方の山間部を流れ遠州灘で太平洋に注いでいる。天竜川は中・下流域が信州の南信地方、遠州、三河の國境（県境）地域は、「三遠南信地域」は、海拔一千メートルの山間地で中世以降集落が発達し、その集落の周辺部の山々に木地師の移住が江戸時代前期の終り頃から行われている。ここでは、天竜川流域の「南信州」の木地師について紹介する。



## 2) 南信州飯田市（以下飯田略）の大平（おおだら）の集落と木地師

大平は飯田と西側の木曽谷の郡境、木曽山脈の山中の平坦地にある集落で海拔一一五〇米。江戸時代中頃に天竜川流域から原生林地帯の木曽山脈に木地師が集落を拓いている。

最初は、木地師の仕事を定職としていたが、飯田から木曽へ通じる街道（大平街道）が発達し、農業をやるかたわら、宿場として発達し木地職をやめている。明治四十年代、東京と名古屋を結ぶ国鉄中央本線が、木曽谷を通ることが決定、やがて開通。飯田周辺の最短距離の駅が、木曽三留野駅であることから、長野県は大平街道を長野県道にし、馬車、自動車の通るように拡大、大平はその中継地点となった。木地師の仕事は江戸時代から中止しているが、農業、林業などの仕事をしている。

苗字は木地師の姓である大蔵姓が中心で小椋姓は一軒も無い。明治時代よそから他の姓の方が移ってきている。昭和四十五年飯田から木曽の通じる国道二五六号線が南の下伊那郡清内路を通ることが決定、国道から外れた大平は信州で二番目の集団移住で集落は消滅した。集団移住後飯田の羽場崎清人氏が大平を守る会を結成、旧宿場の古民家を利用しての宿泊、飯田は大平の分校を活用したキャンプ場として小学生の校外教育を行うなど活用している。明治三十年代長野県道に昇格した大平街道は、冬期は閉鎖されるものの長野県道として残されている。楯英雄は集団移住が発表された直後から飯田内外有志の方々の協力を得て、大平の日々の生活を記録した。『大平の民俗』（昭和四十七年）刊行。内容がよく信州の出版社が再版。その印税で大平に隣接する木曽山脈に続く、「松川」の集落の民俗誌『失われた山村生活』（昭和五十一年）を刊行。『大平の民俗』は、『日本民俗調査報告書集成 中部北陸の民俗』（三一書房、平成八年）に収録されている。楯は初任地和歌山県高野山高校在職時「和歌山県花園村の民俗調査報告書」を執筆。この報告書も三一書房の『日本民俗調査報告書集成 近畿の民俗』に収録されている。

## 3) 大平の民俗で紹介された大平と伊那谷の木地屋

木地師が拓いた大平は木曽山脈の山中で海拔が一一五〇米。木地師の集落のなかで全国でも集落としては最も海拔の高い集落である。大平は、近江君ヶ畑・蛭谷から廻國に来ている。その廻國は次のようである。

### －君ヶ畑氏子狩帳－

第六号簿冊・第七号簿冊・第十二号簿冊・第十六号簿冊・第三十二号簿冊・第四十号簿冊・第四十六号簿冊・第四十九号簿冊。

### －蛭谷氏子駈帳－

享保五年・享保十二年・元文五年・宝暦三年・天保十四年。



－大蔵藤兵覚書－

大蔵藤兵は大平の庄屋筋にあたる「かみ屋」の生れで、安政三年（一八五六）に、先祖の伝承を「覚書」としてまとめたものである。覚書によると、大平を流れる黒川下流の「与茂ぎ平」享保三年（一七一八）に移ってきており、宝暦三年（一七五三）に大平へ移っている。木地師の家数は五軒。以後大平は家数二十八軒、人数一七〇人と記録されている。

4) 飯田・下伊那地方における木地師の定住集落系譜について

『大平の民俗』で木地師の集落について次の七ヶ所を紹介した郷土史の盛んな飯田地方における最初の報告である。

－松川町生田柄山－

松川町は飯田の北、天竜川上流約十キロ、天竜川左岸の深い山中にある。江戸時代の天明・寛政年代に木地師の仕事をやめ農業になった集落で、昭和五十年前後に大蔵姓二十三軒、小椋姓七軒、大倉姓二軒、他に一般の家が数軒ある。平成二十八年柄山出身の大倉清志氏は、柄山の奥約四キロほど奥の大門地籍にある木地師の墓石数個が、前面を流れる谷川によって流出を恐れ、柄山の「大皇明神」の境内に移転を提案している。この墓石の中に寛政七年（一八九五）銘の菊の紋入りのものがあり、大倉清志氏は盗難をおそれビニールシートで包んで保護されている。柄山集落は二百年前に木地師の仕事をやめており、集落の古老にも木地師伝承が消えている。また、過疎集落でよそからのＩターン者が区長をされており、大倉清志氏の希望はかなえられていないのが現状である。この間の経緯については、木地師学会研究報告書で『信州遠山木地師大蔵利兵衛深山秘録』で発表予定である。

天竜村は、下伊那郡の南端、駿河・尾張の境にある村である。倉ノ平は昭和五十年当時、大倉姓が二軒、以前は三軒あった。大倉は大蔵の木地師姓である。この倉平の木地師は、同じ下伊那郡南部の売木村役場に寄託されている。『深山秘録』（下巻）に記録されており、木地師の集落である。

－阿南町鈴ヶ沢－

阿南町和合鈴ヶ沢は三南遠信地方でもとりわけ辺境の地で現在戸数は三戸、内一軒が日本木地師学会々員の大蔵茂氏が家を守るため家族と離れて住んでいる。

鈴ヶ沢で昭和三十二年まで水車轆轤で木地師をされていた小椋豊三（とよみ）氏が暮らしていた。小椋家は大正七・八年頃小椋豊吉（小椋豊三氏祖父）が愛知県豊根村から移り木地師を始めている。大正九年、國學院大學折口信夫先生（歌人釈迦空）が、民俗探訪の途中、岐山平上矢作（現恵那平）海から、下伊那郡平谷村を経て、木地師を訪ね、鈴ヶ沢を訪れ、「木地師の歌十首」を詠まれている。

沢なかの木地屋の家にゆくわれの、ひそけき歩みは 誰れ知られやも

山々をわたりて、人は老いにけり。山のさびしさを われに聞かせつ

木地師、木地屋について多くの歌人、俳人は歌、句を詠んでいるが、歌人釈迦空が鈴ヶ沢で詠んだ「木地屋の歌十首」を越えるものはない。

阿南町鈴ヶ沢周辺は天竜川右岸の深い山々が連なる脊梁山地である。鈴ヶ沢の近くの売木（うるぎ）村がある。二十九年九月末現在の人口は五六五人。売木村軒山に明治時代後期に木地師が二軒定着。

昭和十二年前後まで小椋定三氏は水車轆轤で木地師をしていたが、出征によって木地師の仕事は終わっている。軒山の小椋一美家に所蔵されてきた、和綴の冊子『深山秘録』を阿南高校新野分校教諭松山義雄氏が昭和三十九年訪問世に出ることになった。『深山秘録』は売木本村の隣村下伊那郡根羽村を舞台に、木地師の抗争が起こった。根羽村騒動を木地師の本拠地近江君ヶ畑が事件のいきさつをこと細かくまとめ『深山秘録』として全国木地師に配布し子孫の方々の家に残されている。松山義雄氏は、小椋家に残されていた承平五年、元龜三年、天正十一年、同十五年の御給旨の写し、そして文化元年（一八〇四）の根羽村事件（いわゆる白川一件）の訴訟を詳しく紹介されている。その外、阿南町鈴ヶ沢で木地師をしていた「小椋今太郎聞書」。鈴ヶ沢を訪れた折口信夫（歌人釈迦空）の歌。木曾山中の鞍部に木地師が集落を開拓、定住した。飯田大平の「大平蒼色」。上伊那長谷村の、南アルプス山麓の「平家落人集落・浦」について美しい筆跡で描いている。この三ヶ所は、移住を続けてきた木地師集落の深い山中の地理的立地条件、そして歴史的経緯を知ることができる。小椋一美氏所蔵の和綴の「深山秘録」は、松山義雄氏の著書『深山秘録』の二頁に写真が紹介されている。売木村役場へ寄贈されたこの原本が平成二九年十月現在所存不明となっている。

#### 「深山秘録の後序」・「続深山秘録」（仮題）について

和綴五十三頁、最初に「これの原本は松本市在住の小椋邦彦氏所蔵の家宝古文書なり」とあり、「深山秘録の後序」と記されている。小椋邦彦氏は平成になって松本城近くの田町で木地師をしており、大正時代木曾読書村から松本市へ移られたことをお聞きしていたが、その前には旧木曾神坂村湯舟沢にあり、江戸時代には上村程野の日影岩にいたようである。その小椋邦彦氏宅に残っていた「深山秘録の後序」を軒山の小椋一美氏、あるいはその先生が借りて写したのが五十三頁にまとめられた。小椋邦彦氏の御先祖が江戸時代終りに上村程野から売木村へ移り、小椋一美氏先祖と婚籍関係にあり、その人の写しがこのような形で残されたことは驚きであり貴重な木地師資料となって売木村に残されている。

## V. 結

田中、楯は阿州・信州の峰々、山里訪ね歩き木地師の子孫方々から貴重な資料を頂くと同時に跡切れていた伝承を再び興すことができた。民俗学が足をつかう学問と旧来から先達に云われていたように海拔一千米に及ぶ峰々を踏査し、木地師の暮らし、そして木地師が時代に貢献した基層文化の一端を本論文で発表した。

## 文献

- 市川健夫・井上卓哉・日本木地師学会（2010）：信州秋山郷 木鉢の民俗，川辺書林。
- 徳島県郷土文化会館 民俗文化財集編集委員会（1983）：民俗文化財集「阿波の木地師」，徳島県郷土文化会館，p 45-68.
- 小倉啓介（2016）：「木地屋」呼称と差別・蔑称について（1），木地師研究第200号，p16-18.
- 川上美博（不明）：木地屋の祖神＝惟喬親王の御事＝，山陽ジャーナル。
- 川上美博（1974）：木地師 轆轤師の祖神，（有）三光堂，p 81.
- 岸本浩二（2010）：全国の山々を駆けめぐった 木地師の里 を訪ねて，有限会社 中嶋印刷所。
- 小林忠雄（1993）：色彩のフォークロア 都市のなかの基層間隔，雄山閣出版株式会社。
- 財団法人 民俗学研究所編 柳田國男監修（1951）：民俗学辞典，東京堂出版。
- 沢田白太郎「編集 池田勇次 楯 英雄」（1989）：木地師研究＝沢田白太郎 惟喬親王と洛北の史跡＝第36・37号。
- 杉本 壽（1967）：木地師制度研究序説，株式会社ミネルヴァ書房。
- 杉本 壽（1971）：木地師制度の研究，福井県郷土誌懇談会，p454-455-457.
- 杉本 壽（1974）：木地師制度の研究 第1巻，清水堂出版株式会社。
- 杉本 壽（1976）：木地師制度の研究 第2巻，清水堂出版株式会社。
- 楯 英雄（2005）：長野県下伊那郡喬木村、上村の木地師の遺構－井深勉氏の調査資料を中心として，木地師研究－第173号－，p1-6.
- 田中 誠（2012）：四国山岳山地の木地師伝承（5）－土州・阿州を中心に－，木地師研究第187・188号。
- 田村善次郎・宮本千晴（2012）：宮本常一と歩いた昭和の日本23漆・柿渋と木工，財団法人農山漁村文化協会。
- 著者不明：小椋姓の由来
- 日本木地師学会編（代表編集者 成田壽一郎）（1982）：木地師・光りと影－もう一つの森の文化－，（株）牧野出版。
- 日本生活学会編「須藤 護」（1976）：民具と生活－生活学論集－，株式会社ドメス出版。
- 橋本鉄男（1970）：木地屋の移住史 第一冊・君ヶ畑氏子狩帳，民俗文化研究会。

- 橋本鉄男（1974）：朽木村志 麻生木地山の木地屋たち，朽木村教育委員会，p202-230 .
- 橋本鉄男（1979）：もの与人間の文化史 ろくろ，法政大学出版局.
- 橋本鉄男（1982）：木地屋の民俗，岩崎美術社.
- 半田町誌出版委員会（1981）：半田町誌 下巻，半田町誌出版委員会事務局， p 194-245.
- 東祖谷山村誌編集委員会（1978）：東祖谷山村誌，株式会社新芳社， p 231-272, p 477-503.
- 松山義雄（1985）：深山秘録－伊那谷の木地師伝承－，財団法人法政大学出版局.
- 宮本常一（1964）：山に生きる人々 日本民衆史 2，未来社刊.
- 柳田國男（1957）：資料としての傳説，村山書店.

### 編集後記

論文執筆に際し、三好市郷土史家の内藤良一氏、東みよし歴史資料館、東祖谷歴史民俗資料館より貴重な資料を提供して頂いたことに深甚の意を表します。また一字村字木地屋で暮らす小倉智・百合子氏、松岡輝一氏には、木地師資料採集のため深山幽谷の地へ数時間かけて同行して頂いたことを心底より敬意を表します。